

資料

高等学校の「書くこと」に関する指導の現状と課題 —よりよい高大接続をめざして—

北澤正志*¹ 橋本美香*² 國弘保明*¹ 根来麻子*³

要 約

社会変動の激しい現代社会においては、確かな情報収集と論理的思考力に基づく課題解決能力の育成が重視されている。こうした学力の育成に、高等学校の学習指導要領で示されている「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えをまとめること」という意見文の学習は有効である。「書くこと」に関する学習活動は「思考力、判断力、表現力」を鍛え、課題解決に対する資質・能力の向上に繋がる。しかし、大学に入学した時点では、主体的に情報収集を行うという姿勢が身につけておらず、事実と意見を区別する表現さえあいまいである。そこで、本稿では、高等学校の「書くこと」に関する学習活動について、具体的にどのような点に課題があるのかを明らかにすることを目的とした。このための方法として、本学の必修科目「文章表現」の受講者を対象としてアンケートを実施し、高等学校の「書くこと」に関する指導の現状と学生の実態を分析した。その結果、高等学校においては、主体的な情報収集、客観性の高い資料に基づいて書くという経験が少ないことが明らかとなった。このことから、大学の初年次教育においては、こうした現状をふまえて指導しなければならないことが示唆された。また、課題解決能力の育成のためには、高等学校の「書くこと」の学習活動における情報収集から推敲にいたるまでの学習過程を具体的に構成する必要があるという今後の課題が明らかとなった。

1. はじめに

1.1 今後の社会に求められる課題解決能力

現代は、グローバル化が一層進み、技術革新が絶え間なく生まれ、国内外で大きな社会変動が続く、先行きの不透明な時代である。こうした社会においては、多様な人々と協力しながら主体性を持って課題を解決していく資質・能力が求められる。

文部科学省は、自ら課題を見付け、主体的に課題を解決できる「生きる力」を育むため、学習指導要領を改訂した。次期学習指導要領では、子どもたちに「何ができるようになるか」を明確化させるにあたり、各教科の目標及び内容を次の3つの柱に再整理した¹⁾。

- (1) 知識及び技能が習得されるようにすること。
- (2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること。
- (3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること。

これら3つの柱に再整理された内容を「主体的・対話的で深い学び」によって質を高め、新しい時代を「生きる力」として自ら課題を見付け、解決していく資質・能力を育成することが、学習指導要領改訂の目的のひとつである。

1.2 課題解決能力の養成に有効な論理的文章

3つの柱として示された資質・能力をバランス良く向上させるためには、意見文を書く学習が有効である。客観性や信頼性の高い資料を調べてこれらを活用する過程を通して、知識及び技能を習得することができる。また、論拠に基づきながら論理構成や展開を工夫することで、論理的思考力や判断力が鍛えられる。さらに、社会に目を向けることで、自ずと「学びに向かう」意味を考え、主体性が育まれる。加えて、「主体的・対話的で深い学び」によってこれらを実践していけば、協働的な学習能力も身につ

*1 川崎医療福祉大学 総合教育センター

*2 川崎医科大学 語学教室

*3 甲南女子大学 文学部 日本語日本文化学科

(連絡先) 北澤正志 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail : m-kitazawa@mw.kawasaki-m.ac.jp

けることができるであろう。高等学校学習指導要領ではまさにこうした学習活動が求められており²⁾、これらを実践していくことが望まれる。

現行の学習指導要領解説でも指導事項として、「客観性や信頼性の高い資料を用いて、自らの論が成り立つ根拠を示すこと」、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」が示されている³⁾。また、次期学習指導要領で新設される「論理国語」では、「様々な観点から情報を収集し、情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、多面的・多角的な視点から自分の考えを見直すこと」が求められている⁴⁾。

しかし、多くの大学が1年次生を対象として、レポート及び論文の書き方を基本から教育しているという実態があり、高等学校での習得が不十分であることがうかがえる。

こうした現状にあるのは、高等学校の学習活動において、客観的資料から事実を読み取るという活動、主体的に資料を収集するという活動が十分に行われていないからではなかろうか。客観的資料の収集をしながら、主張の根拠を論理的に検討する活動を行わなければ、「生きる力」としての課題解決能力の育成には結びつかない。高等教育への接続、社会人基礎力育成の観点から考えても、問題がある。

こうしたことから、高等学校の国語における「書くこと」について指導の現状を把握することが必要であると考えた。これまでの文章表現に関する研究は、大学の初年次における効果的指導法に焦点を当てたものが中心となっており、高大接続の観点から、高等学校の学習指導要領の内容および現状をふまえた研究は十分になされていない。一方で、高等学校の国語の指導において学習指導要領の内容が十分に行われていないとの報告はあるが⁵⁾、高等学校での「客観性や信頼性の高い資料」の主体的活用という点に重点を置き、課題解決能力の育成を「書くこと」を通して行おうとする研究は行われていない。そのため、本研究は、課題解決能力・論理的思考力の育成を、高大接続の観点から、高等学校国語科における「書くこと」の指導内容を充実させることで行おうとするものである。

2. 「書くこと」についての指導の現状

2.1 国立教育政策研究所の調査など

文章を「書くこと」は論理的思考力育成には有効であるが、高等学校の国語において十分な指導がなされていないということが推測される。

国立教育政策研究所が行った「特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果」によると、「理

由や根拠を明確にして自分の考えや意見を述べる」指導を大切だと答えた教師が98.8%に上るなど、「書くこと」を通して論理的な思考力の育成をはかる指導をほとんどの教師が肯定的に捉えている。一方で、「様々な考え方ができる事柄について、幅広い情報を基に自分の考えや意見をまとめ発表する」指導を実施している割合は48.2%と約半数にとどまっている。また、生徒へのアンケート調査では、学校の授業で自分たちが収集した資料を基に話し合う活動があるかという問いに、83.2%が「あまりない」、「ない」と回答している⁶⁾。このアンケート調査では「幅広い情報」がどのようなものを指すのか曖昧であり、「話すこと・聞くこと」と「書くこと」は領域が異なるため、さらに詳細な調査が必要であるが、情報を活用し表現に結びつける指導があまり行われていないことはわかる。

また、高等学校の国語の指導に関して、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の表現に関わる指導事項に該当する内容は、十分に行われていないという報告もある⁵⁾。これは、学習指導要領の3領域「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」について、大学1年生を対象に、高等学校でどのような指導を受けてきたのか、学習指導要領の指導事項に即してアンケート調査を行い、その結果を分析したものである。

このように「話すこと・聞くこと」、「書くこと」など表現領域での指導が十分に行われていないことは既に明らかとなっている。このため、次の段階として、学習指導要領に定められている「客観性や信頼性の高い資料を用いて」という点（客観的資料の活用）、調査への主体性、「事実と意見」の区別という点に焦点を当てて、「書くこと」に関する学習及び指導の現状を具体的に把握する必要があると考えた。なぜならば、論理的思考力を鍛える場合に前提となることは、主体的に調査した客観的資料（事実）に基づいて論を展開するという姿勢であり、「書くこと」に伴う主張と論拠の整合性の検討が論理的思考力を育成するからである。さらに、こうした学力を育むために、表現レベルではまず事実と意見を区別することが求められるからだ。こうしたことから、高等学校の情報収集に関する現状把握を目的として、本学の2018年度春学期「文章表現」受講者472名を対象としてアンケート調査を行った。調査期間は7月18日から26日で、対象は1年次生である。なお、アンケート対象者には、「研究対象者への説明文書」を配布し、趣旨に同意した者へのみ回答を求めた。本アンケートの実施については、川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号18-019, 2018年6月14日）。

2.2 本学でのアンケート調査結果

まず、高等学校において、小論文の書き方を何時間学んでいるかを図1に示した(Q2)。「ほとんど学んでいない」と回答した学生が90名(19%)であった。4時間以上が239名(51%)、5時間以上学んでいた者は、173名(37%)であった。

Q2. 高校の3年間で、小論文の書き方について、授業でトータル何時間ぐらい学びましたか。(書いた回数ではない)

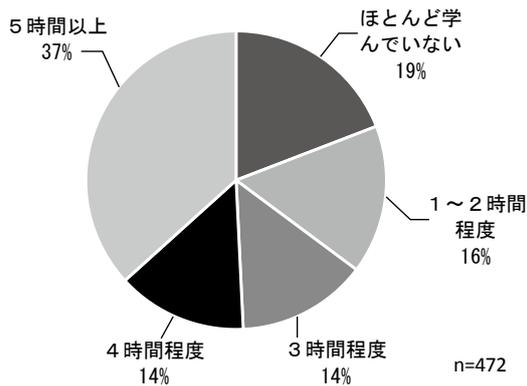


図1 高等学校における小論文の書き方に関する指導時間

次に、高等学校において、資料(客観的なデータ)に基づいて意見文を書いた経験の有無を図2に示した(Q6)。「資料(客観的なデータ)」とは、高等学校での教科書・資料集等に用いられている資料、及び白書等の信頼性の高い資料を指す。この調査に「ある」と回答した学生は、212名(45%)であった。

Q6. 高校の時、資料(客観的なデータ)に基づいて小論文を書いたことがありますか。

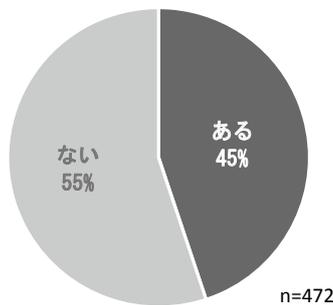


図2 客観的資料に基づいた小論文の作成の有無

アンケートでは、「意見文」ではなく、一般的な言い方である「小論文」を用いた。

次に、高等学校において、自分で資料を調べて意見文を書いた経験の有無を図3に示した(Q7)。その結果、自分で資料を調べて意見文を書いた経験のある学生(①~④を回答した合計)は、201名(43%)であった。また、この201名のうちの122名が「資料(客観的なデータ)」にもとづいた小論文作成の経験があり(Q6)、全体の26%であった。

の結果、自分で資料を調べて意見文を書いた経験のある学生(①~④を回答した合計)は、201名(43%)であった。また、この201名のうちの122名が「資料(客観的なデータ)」にもとづいた小論文作成の経験があり(Q6)、全体の26%であった。

Q7. 高校の時、小論文を書くときに、自分で資料(データ)を調べて書きましたか。(複数回答可)

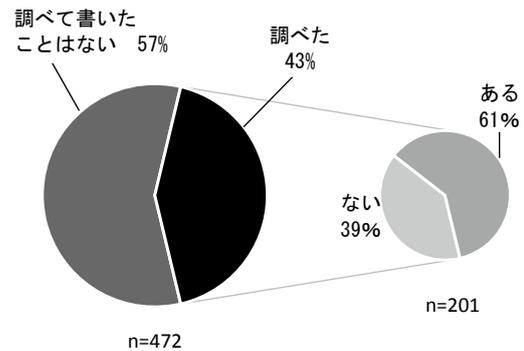


図3 自分で資料を調べた経験の有無

(注) 左…上記の問に対する回答

「調べた」は、Q7の回答①~④を合計した数である。

右…「調べた」経験がある者のうち、資料(客観的なデータ)に基づいて書いた経験の有無

自分で資料を調べて意見文を書いた経験のある学生201名について、そのツールを図4に示した(複数回答可)(Q7)。インターネットを用いて調べた者が148名と最も多く、他のツールはいずれも半数以下である。なお、インターネットを用いて調べたと回答した者のうち、70名(47%)は他の回答がないため、インターネット以外での調査を行っていないと考えられる。また、インターネット利用者の148名のうち59名(40%)は、「出典は意識しなかった」と回答していた。

Q7. 高校の時、小論文を書くときに、自分で資料(データ)を調べて書きましたか。(複数回答可)

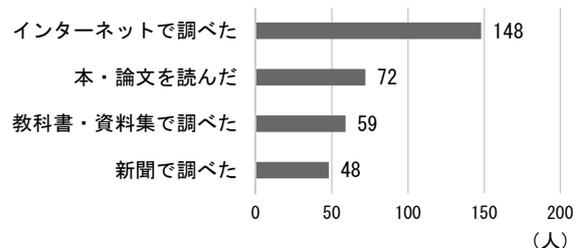


図4 資料を何で調べたか

(注) 「調べて書いたことはない」と回答した者は271人。それ以外の201人の内訳(複数回答可)

次に、自分で資料を調べた201人について、その目的を図5に示した。「現状（事実）を把握する」が115人、「現状の背景・要因を理解する」が99人であった。「書き方の参考にする」など、資料としての活用を行っていない回答も見られた。

Q9. 資料を調べた目的は何でしたか。

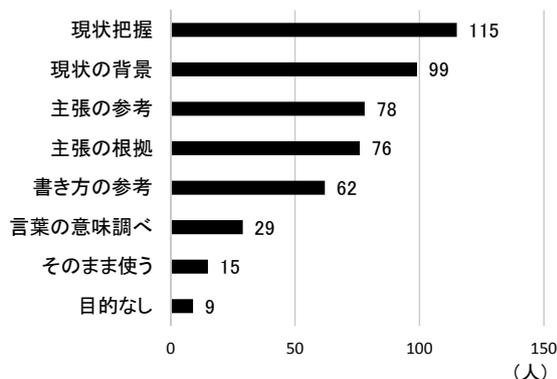


図5 資料収集の目的

(注) 「自分で資料を調べた」と回答した201人の内訳(複数回答可)

次に、「事実と意見を区別する」と「根拠(理由)を示す」ことについて、高等学校での指導の現状を図6に示した。これを分析するため、「論点を絞る」、「正確に表記・表現する」、「段落を設ける」の3項目と合わせてアンケートを取った(Q3)。

「事実と意見を区別する」ことを教えられたと回答した者は218名(46%)であり、これを高等学校のときにできていたと回答した者は91名(19%)だった。また、「根拠を示す」ことを教えられたと回答した者は、323名(68%)だった。

Q3. 小論文の書き方について、高校の時に指導を受けたことに☑をいれてください。(複数回答可)

Q5. 小論文の書き方について、高校の時にできていたことに☑をいれてください。(複数回答可)

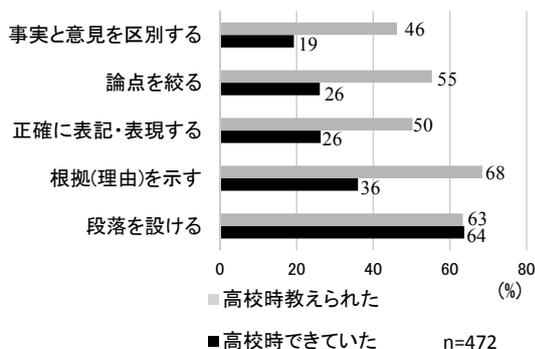


図6 高等学校での指導

次に、レポート・論文を記述する際に、何が最も難しいと思うのかを、5項目から1つを選択する形式で調査し、これを図7に示した。「根拠を示す」ことが34%で最も多く、主張を述べること、表現に関することを上まわった。

Q11. 現在、小論文を書くうえで、最も難しいと思うことは何ですか。

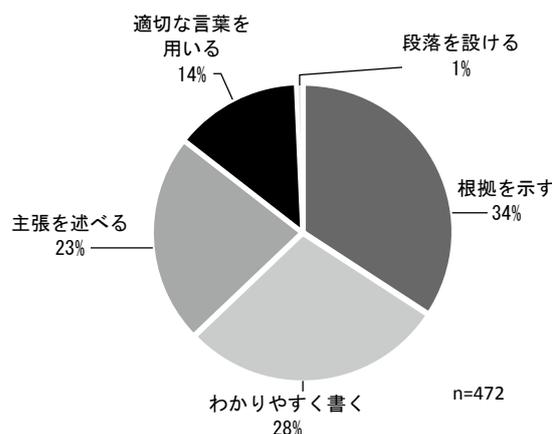


図7 小論文を書くうえで難しいこと

3. 考察

3.1 アンケートの結果について

情報収集能力と論理的思考力を鍛え、課題解決能力を育成するという「書くこと」の目標から考えると、資料の収集及び活用に関する学習は不十分であると考えられる。アンケートの結果から、次のような課題が見つかった。

課題(1)「書くこと」に関する指導時間が少ない

高等学校の国語は、「国語総合」(標準単位4)が必修科目となっており、そのうちの30~40時間程度を「書くこと」を目標とする時間に配当するように定められている。また、普通科の多くが履修している「現代文B」では「書くこと」の配当時間は明確に定められていないが、「書くこと」を目標とする時間を設けることは学習指導要領解説で指示されている。こうしたなか、意見文の書き方の学習に何時間程度要するというは一概に言えないが、3時間程度では資料(材料)収集・文章構成・表現など「書き方」についての様々な内容を教えられない。図1に示したように、「3時間程度」以下の回答が49%というのは多くの学生が十分な学習を行えていないことの裏付けとなる。

課題(2) 資料収集の目的・意義が理解できていない

図2に示したように、客観的資料に基づいて小論文を書いた経験のある者は半数以下である。また、

図3に示したように、「自分で資料を調べた」と回答した者は201名（43%）であり、そのうち「資料（客観的なデータ）」にもとづいた小論文の作成の経験があった者は122名（61%）であった。これは、アンケート調査対象者の26%にあたる。この数値は、高等学校の学習指導要領解説の指導事項として、「客観性や信頼性の高い資料を用いて、自らの論が成り立つ根拠を示すこと」が記載されていることからすると、少ないと言わざるを得ない。客観的資料に基づいて自分の考えを言語化し、その内容を検討していくことで思考力が育成され、説得力のある文章となる。また、こうした経験を通して事実をふまえて書くことの重要性も理解できるはずだが、アンケート結果からすると資料収集の意義は理解できていないと考えられる。

また、図5に示したように、資料収集の目的を「現状把握」、「現状の背景」、「主張の根拠」としている者は約半数である。これも、事実をふまえ、根拠を示すために資料を調べるという資料収集目的が理解できていないことを表していると言えよう。

課題（3）信頼性の高い情報収集を、様々な観点から行えていない

課題（2）と関連する内容であるが、収集した資料の客観性・信頼性という観点からみても問題がある。Q8の質問から、インターネットで情報収集を行った者のうち40%が「出典は意識しなかった」としていることがわかる。また、インターネットによる情報収集を行なった者のうち47%は他のツールを用いておらず、情報を検証する作業ができていない。現学習指導要領でも、資料収集について、図書館の利用や新聞の活用が促されているが、図5の結果から見ると、こうした学習活動は十分に行われていないと推察できる。情報の信頼性を意識しながら、様々な観点から客観的資料を収集する学習活動を充実させなければ、情報リテラシーは育成されず、インターネット社会に対応できない。高等学校では、情報科との連携を図りながら、客観性や信頼性のある情報収集の手段を学ばせる必要がある。

課題（4）学びへの主体性が育成されない

先にも述べたように、次期学習指導要領改訂の目的は、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、判断して行動する能力の育成にあるが、図3に示したように、自分で資料を調べて意見文を書いた経験のある学生は半数もいなかった。次期学習指導要領では「様々な観点」、「多面的・多角的な視点」がキーワードになっている。主体性を育むためには、教師が様々な観点を提示し、生徒自身が視野を広げることが意識しつつ、自ら情報収集を行う学習活動を取

り入れることが必要となる。

課題（5）論理的思考力の育成に繋がらない

課題（2）・課題（3）と関連するが、客観性や信頼性の高い資料を用いて、自らの論が成り立つ根拠を示そうとする思考過程において、論理的思考力は育成される。自らの考えについて、何を根拠とするか、事実をふまえながら思考を深めることが重要であり、客観的資料の収集の過程そのものに意義がある。また、図6に取り上げた「事実と意見を区別する」ことは、思考を整理していくうえで必須の事項であり、論理的な文章を書くうえでの基本事項と言える。しかし、このことを「教えられた」とする回答が50%を下回っているのも問題であり、これでは論理的思考力を育成するうえでの基本が備わらない。文部科学省が第3期教育振興基本計画で示しているように、現在の教育はアウトカムを重視しており、「何ができるようになったのか」という点に評価の観点を置くものとなっている⁷⁾。そうした観点でこの結果をみると、十分な指導ができていないと言わざるを得ない。客観的資料に基づいて「書くこと」を指導すれば、「事実と意見を区別」して書く指導が付随する。生徒に「事実と意見を区別」して書くことを学習させるためにも「客観性や信頼性の高い資料」の活用は重要である。

以上、課題について見てきたが、書くうえでの難しさに関する調査で、「根拠を示す」とことと回答した学生が最も多かったことは肯定的に捉えられる。なぜなら、文章の論理性を吟味する際、論拠は最も重要なものであり、この点に難しさを感じるというのは深い内容を志向していることが背景にあると考えられるからである。根拠に裏付けをもたせ、説得力ある論証をするための学習活動を行う場合、基礎学力定着の度合いによって指導の目標にある程度の幅ができるのはいたしかたないだろう。ただ、少なくとも客観的資料に基づいて考えるという姿勢は育まなければならない。

3.2 指導が十分に行われていない背景

「書くこと」に対する指導が十分に行われていない原因のひとつに大学入試の影響があると考えられる。大学入試で「小論文」等を実施している大学は少なく、「読むこと」の学力をはかる問題が大半を占める。よって、島田らの調査にもあるように、高等学校の国語教育は、「知識・技能」の習得と「読むこと」の学力養成に比重が置かれる傾向にある⁵⁾。教科書に取り扱われている評論は、過去の入試問題、あるいは入試に類する文章が掲載されている場合が多く、「書くこと」の指導教材には適さない。例えば大学入試センター試験における「国語」の過去10

年間の平均点は6割を下回っており、これらの問題を理解するにはある程度の学力を要する。このような文章で「書くこと」に主眼をおいた指導を展開することは難しい。

また、評価の難しさも小論文の指導が十分になされていない要因だと考えられる。評価基準は生徒の実態に応じて設定しなければならないが、その前提とすべき基準は国語の学習指導要領に示されておらず、現在のところ共有されていないのが実状ではなかろうか。内容に関わる部分では、評価に客観性を担保するのも難しい。さらに、評価及び添削指導には時間を要する。こうしたことも、小論文指導を困難にしている要因だと考えられる。

3.3 まとめ

以上のようにアンケート調査からみると、指導要領に示されている「客観性や信頼性の高い資料を用いて、自らの論が成り立つ根拠を示すこと」という学習活動は、不十分であると捉えられる。自分の考えを、事実に基づいて論拠を示しながら説明するという論理的思考力は、学校、職場など社会のあらゆる場面で必要な資質・能力であるが、このための基礎力が養われているとは言えない。また、客観的資料を収集するという学習活動は、ものの見方を広げると同時に学びへの主体性をも育むはずだが、現状ではこうした学力も身につけられないだろう。高等学校においては、客観性や信頼性の高い資料を収集する学習を丁寧に行うことでその意義を理解させ、少なくとも事実に基づいて論拠を述べるという姿勢を身につけることが重要であると考えられる。

4. おわりに

課題解決能力育成のために、客観性の高い資料にもとづきながら、論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる学習は有効である。しかし、高等学校においては、資料の客観性や信頼性を確認しながら、幅広い観点から主体的に資料を収集し、自らの主張の根拠としていくという学習活動が十分にはなされていないことがうかがえた。

こうしたなか、文部科学省は2022年から実施される次期学習指導要領において、様々な観点から資料を収集し、多面的・多角的な視点から課題を考察することで、思考力、判断力、表現力等の向上を目指すという方向性をより鮮明に打ち出した。

大学入試も様変わりをする。現在の大学入試は、本文の主張（内容）を文章の構成や表現に即して素直に読解することができれば概ね解答が可能である。しかし、2021年1月より実施される大学入学共通テスト（新テスト）は、複数の題材を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じた文章を書いたりすることが求められる⁸⁾。

こうした改訂は、高等学校と大学教育の接続を意識しながら、課題解決能力を育成するための資質・能力の向上を目指したもので、その主旨は肯定的に受け止められる。

高等学校の国語の授業においてこのような動きに対応していくためには、「読むこと」に比重が置かれていた内容を見直し、「話すこと・聞くこと」を含めた3領域をバランスよく指導しなければならない。また、そのためには、「書くこと」についての教科書の構成・内容を生徒自身が主体的に学習できるよう工夫すべきである。こうすることで、現場の教員が指導しやすくなるであろうし、主体的な課題解決能力の育成にも繋がる。

具体的な構成・内容としては、客観的な情報収集の方法をわかりやすく提示すること、根拠を深めていくための主体的・対話的学びの場面を具体的に提示すること、文章構成や展開が明瞭でパラグラフライティングで書かれた例文を掲載することなどが必要となるのではないだろうか。そのためには、まず、教科書の「書くこと」に関する教材の分析が必要と手なるが、これは今後の課題としたい。

課題は多いが、21世紀型学力に客観的な情報収集能力と論理的な思考力の養成は不可欠であり、これには「書くこと」の学習活動が有効である。「書くこと」について高等学校から高等教育へよき道筋をたてることで、「生きる力」を育むことが可能であると考えている。

謝 辞

本研究は平成29年度医療福祉研究費の助成を受けたものです。

文 献

- 1) 文部科学省：新高等学校学習指導要領について。
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiefieldfile/2018/09/14/1408677_1.pdf, 2019. (2019.3.1確認)
- 2) 文部科学省：平成30年改訂高等学校指導要領。

- http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf, 2018. (2019.2.15確認)
- 3) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説国語編. 教育出版, 東京, 2010.
 - 4) 文部科学省：高等学校指導要領解説国語編.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf, 2018. (2019.2.15確認)
 - 5) 島田康行：大学初年次生が経験した高校「国語」の学習内容—「学習指導要領」の指導事項と実際の指導状況—. 大学入試ジャーナル, 24, 179-184, 2014.
 - 6) 国立教育政策研究所：特定の課題に関する調査（論理的な思考）調査結果.
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_ronri/pdf/10_tyousakekka.pdf, 2013. (2018.8.10確認)
 - 7) 文部科学省：第3期教育振興基本計画.
http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/__icsFiles/afieldfile/2018/06/18/1406127_002.pdf, 2018. (2019.2.15確認)
 - 8) 大学入試センター：「大学入学共通テスト」における問題作成の方向性等と本年11月に実施する試行調査(プレテスト)の趣旨について.
<http://www.dnc.ac.jp/news/20180618-01.html>, 2018. (2018.6.20確認)

(令和元年8月2日受理)

参考 アンケートの質問文

- Q 1. 高校時の学科は何でしたか。
 ①普通科 ②商業科 ③工業科 ④総合学科 ⑤その他
- Q 2. 高校の3年間で、小論文の書き方について、授業でトータル何時間ぐらい学びましたか。(書いた回数ではない)
 ①ほとんど学んでいない ②1~2時間程度 ③3時間程度 ④4時間程度 ⑤5時間以上
- Q 3. 小論文の書き方について、高校の時に指導を受けたことにをいれてください。(複数回答可)
 ①論点(課題)を絞る ②事実と意見を区別する ③根拠(理由)を示す
 ④段落を設ける ⑤正確に表記・表現する
- Q 4. 小論文の書き方について、高校の時に重視していたことにをいれてください。(複数回答可)
 ①論点(課題)を絞る ②事実と意見を区別する ③根拠(理由)を示す
 ④段落を設ける ⑤正確に表記・表現する
- Q 5. 小論文の書き方について、高校の時にできていたことにをいれてください。(複数回答可)
 ①論点(課題)を絞る ②事実と意見を区別する ③根拠(理由)を示す
 ④段落を設ける ⑤正確に表記・表現する
- Q 6. 高校の時、資料(客観的なデータ)に基づいて小論文を書いたことがありますか。
 ①ある ②ない
- Q 7. 高校の時、小論文を書くときに、自分で資料(データ)を調べて書きましたか。(複数回答可)
 ①ネットで調べた ②新聞で調べた ③本・論文などを読んだ
 ④教科書・資料集で調べた ⑤調べて書いたことはない
- Q 8. 【Q7で①と答えた人】どんなサイトを見ましたか。該当するものにをつけてください。(複数回答可)
 ①政府などのサイト(白書など) ②新聞社のサイト ③学会・医療機関などのサイト
 ④筆者が特定できるサイト ⑤出典は意識しなかった
- Q 9. 【Q7で①~④と答えた人】資料を調べた目的は何でしたか。(複数回答可)
 ①現状(事実)を把握する ②現状の背景・原因を理解する
 ③どんな主張(意見)があるのか調べる ④主張の根拠・理由を調べる ⑤言葉の意味を調べる
 ⑥書き方の参考にする ⑦そのまま使える(書ける)ものを探す
 ⑧明確な目的なしなんとなく調べた
- Q 10. 高校の時、小論文の「序論・本論・結論」について、それぞれどのような内容を書くのか理解していましたか。
 ①理解している ②だいたい理解している ③あまり理解していない
 ④理解していない ⑤聞いたことがない
- Q 11. 現在、小論文を書くうえで、最も難しいと思うことは何ですか。(一つだけ選んでください)
 ①適切な言葉・語彙を用いる ②わかりやすく正確に表現する
 ③意見(主張)を述べる ④根拠・理由を述べる ⑤段落をもうける
- Q 12. ニュースを見ていますか
 ①新聞を読む ②テレビのニュースを見る ③ネットのニュースをみる ④何も見ない
- Q 13. 文章表現で「受験ブーム」の記事を批判的に読みましたが、高校の時にこのような「批判的な読解」をしたことがありますか。
 ①ある ②ない
- Q 14. 高校の時に、複数の文章(例:教科書+教科書以外)を同時に使った授業を受けたことがありますか。
 ①よくあった ②時々あった ③ほとんどなかった ④なかった

Current Status and Problems of Writing Education in Senior High Schools: Towards Improved Transition from High Schools to Universities

Masashi KITAZAWA, Mika HASHIMOTO, Yasuaki KUNIHIRO and Asako NEGORO

(Accepted Aug. 2, 2019)

Key words : information collection, reasoning skills, writing

Abstract

The development of problem solving competencies based on solid skills for information collection and reasoning is regarded as crucial in the modern society with rapid social changes. Learning how to write opinions, which is described as “presenting one’s own opinions that are well-structured and are supported by sound reasoning” in the Course of Study for senior high schools, is effective for nurturing such competencies. Learning activities in writing education foster students’ capacity to think, judge and express ideas, which leads to enhanced problem-solving qualities and abilities. However, first-year university students are not usually equipped with attitudes to actively collect information or expressions for differentiating between facts and opinions. This paper aims to describe problems concerning learning activities in writing education for senior high school students. In this study, the current status of writing education in senior high schools and students’ competencies and learning experience were analyzed through a questionnaire survey administered to the students taking Writing Expressions, a required course at the Kawasaki University of Medical Welfare. The results show that high school students have limited experience with actively collecting information and writing using objective proof. This indicates that the first-year education at universities should reflect such a situation. It is also revealed that a learning process from information collection through revision needs to be clearly organized in writing activities for senior high school students.

Correspondence to : Masashi KITAZAWA

Comprehensive Education Center

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : m-kitazawa@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.29, No.1, 2019 165 – 173)